

## 文学研究 (古典和歌)

小池 博明

紙幅から、三代集時代を対象とする。

本年も、表現研究の基礎となる、和歌の注釈が盛行であった。和歌文学会編集「コレクション日本歌人選」(笠間書院)は、こうした近年の動向を概括した感がある。個別のものでは、川村晃生氏・金子英世氏『『曾禰好忠集』注解』(三弥井書店)が、古態を保つとされる異類本を底本とし、新見も多く充実している。表現に重点を置く半澤幹一氏・津田潔氏『『新撰万葉集』注釈稿』(共立女子大学文芸学部紀要57他)が、着実に続いている。

文学研究では、和歌の表現研究は自立語が中心だが、古来テニハが重視されてきたことから、付属語や構文に研究対象を広げる必要がある。この点から、浅田徹氏「源氏物語の歌風一面」(中古文学88)は興味深い。「～に～が添う」を源氏物語の個性的な歌型とし、景と情を便利に一致させるものとする。この歌型と構文とは同様に扱えないが、助詞や構文に関係する方法である。氏は、さらにこの歌型を、添加の構造として「～に～」に抽象化する。かつて佐藤和喜氏が拾遺集時代の和歌の特質として指摘した、「に」による接続が思い合わされ、問題は11世紀前半の和歌の表現に広がる。散文だが、付属語に留意するものに、徳原茂実氏「古今集仮名序冒頭部の和歌史観」(国語と国文学1056)がある。古今集仮名序冒頭文の助動詞「り」の現在性に着目し、新たな意味を読み取る。

表現研究において修辞は重要な問題だ

が、修辞自体を扱う論は案外少ない。その中で、平野由紀子氏の講演「古今和歌集一かけことばと文脈一」(和歌文学会第57回大会)は、氏の掛詞論を平易に説いたものだった。共通音声部分を広く掛詞とし、「AはBなれや」などの構文に関連づけ、古今集の明晰で自覚的な言葉の関係を明らかにする(平野氏『平安和歌研究』風間書房参照)。大塚英子氏『古今集小町歌生成原論』(笠間書院)は、小町歌の掛詞の特質を詳説。

和歌は他の分野以上に、場面が表現を規制する力が強い。その点から、長谷川範彰氏『『源氏物語』「宿木」巻の〈唱和歌〉をめぐって』(中古文学87)、倉田実氏「源氏物語〈唱和歌〉規定の再検討」(同前88)など、唱和歌についての問題提起が相次いだのは、注目される。2012年だが、倉田氏の論を契機に発表された久保木哲夫氏「〈唱和歌〉再考」(和歌文学会1月例会)は、和歌全体の問題として、享受者を基準に、晴と褻、褻における贈答・唱和・独詠を明快に定義づけた。この指摘自体は既に著書『折の文学』(笠間書院)にあるが、唱和に限らず、詠歌の場面をどう整理するか、その方向性を示唆する。

他に、森田直美氏『平安朝文学における色彩表現の研究』(風間書房)は、幾つかの歌語に新見を示す。特に、「紫の雲」論は重要。西山秀人氏『『土佐日記』の和歌表現』(上田女子短期大学紀要34)は、土佐日記の和歌の万葉集摂取を、表現の面から具体的に指摘する。

以上、遺漏や誤解もあるかと思うが、ご容赦願いたい。

(長野高等専門学校)